

THE ROTARY CLUB OF NAGOYA-CHIKUSA



WEEKLY

なごや ちくさ

題字 黒野清宇

名古屋千種ロータリークラブ
 承認 1982年 8月24日
 例会日 火曜日 12:30
 例会場 愛知厚生年金会館
 事務局 TEL763-5110 FAX763-5121
 会長 小坂井 盛朗
 幹事 舎人 経 昭
 会報・雑誌委員長 伊藤 健 文

No.15

手を貸そう

Lend a Hand

2003~2004年度 RI会長 ジョナサン・B・マジアベ

きょうの例会
 第1017回 平成15年11月11日(火)

卓話 “陶あれこれ” 会員 神崎 住恵さん

先週の記録
 第1016回 平成15年10月28日(火) 曇り

◆“奉仕の理想”

◆斉唱 “四つのテスト”

◆出席報告

会員	67(60)名	出席	48名
出席率	80%		
前々回	10月14日(修正出席率)		100%

◆ビジター紹介 1名

◆ゲスト紹介

青少年交換学生 ブリジェットさん
 国際親善奨学生 ナターリアさん

◆11月会員誕生日

鈴木 理之君 (11/7)、伊豫田博明君 (11/14)
 加藤 大豊君 (11/14)、二村 聡君 (11/16)
 松居 敬二君 (11/25)

舎人幹事報告

1. 本日例会終了後、指名委員会を開催致しますので、指名委員の方は2階オーキッドルームにお集まり下さい。
2. 11月4日は定款第5条第1節により休会となり、次回例会は11月11日(火)です。
3. 11月8日・9日の地区大会参加の方は開始時間と場所をお間違いないようご出席下さい。
4. ロータリーレート現在1ドル116円ですが、11月1日より110円に変更されますのでお知らせ致します。

Answer & Question

〔質問〕

“ロータリーに共通する雑誌は？”

〔回答担当者 松居 敬二〕

ロータリーの雑誌はRIの発行する「ロータリアン誌」だけが購読義務のある機関雑誌でしたが、「ロータリーの友」が創刊されRIの公式地域雑誌となりました。

又、ロータリーの友英語版も年2回発行されています。

「ロータリーの友」は1991年1月、RI第7回ロータリー地域雑誌セミナーで、全世界の地域雑誌30誌(27ヶ国)の中で内容・編集技術など、6部門にわたって総合最優秀賞を受賞しております。

昨年よりA4変型版となり、活字が大きく、写真と、カラーも多く大変読みやすくなっております。

原則的に横ページは主にロータリーに関する記事で、縦ページは一般的な内容となっており、その中には他の地区や他クラブの奉仕活動とか新入会員の方にはロータリーの活動を知って頂くのにも大変解りやすいと思いますので、どうかお時間があれば自分の関心があるところからでも読んで頂きたいと思っております。

小坂井会長挨拶

お塩が砂糖の様に美味しい

終戦後、旧満州国よりソ連軍の捕虜となってシベリアへ抑留されたという軍人の数が日本側の勘定した人数とソ連が受け入れたという人数では大きく異なるのだ。勿論ソ連側がいう人数の方が十万人近く少ない。そんな馬鹿などという事だが事実なのである。

何故か、それは我々捕虜は貨車に荷物のように積み込まれて連行され、ソ連側は捕虜を一人一人カウントせず貨車単位でカウントして受け入れたのである。そして厳寒のシベリアでまず住む家を作らせ一日の休みも与えず伐採に追いやり過酷な死の労働を強いたのである。

しかも満州からは人だけでなく日本軍貯蔵の膨大な食糧・衣料等をも無断で持ち去りながら我々には僅かな食糧しか支給しなかったのである。これが日ソ不可

侵条約がありながら終戦の僅か一週間前に侵攻して来たソ連の仕打ちである。そして厳寒のシベリアで一冬を越す間に沢山の戦友が異郷の丘に命を散らして行ったのであった。異国の丘の歌がそれを物語っている。ある日、我々は一人ずつソ連将校に呼び出され質問を受けようやく国際捕虜名簿に記載、初めて晴れて？日本兵捕虜として戸籍がで上がったのであった。

月とくさり鎌と赤十字のマークのついたクリーム色の厚紙で出来た国際捕虜名簿のカードを前にして若いソ連将校の流れるような日本語での質問に私はまずびっくりしてしまった。それはちょうどおもちゃの兵隊を思わせるような二十歳位の若いソ連将校。たしか少尉の位であったと思うがラーゲル（収容所）の中をいつからか見廻りに来るようになった時、我々は何の警戒心もなくニコニコと見廻るこの若い将校が日本語ペラペラである事など夢想だにできなかった。

我々はその少尉を完全に無視し小馬鹿にしたような態度でいた訳である。その若い少尉殿が国際捕虜名簿を作る時の調査官であり日本語が非常に上手である事を知って皆が愕然としたのは、ニコニコとしながらラーゲルの宿舎内を見廻り元憲兵・特務警官であった者を全部調べ上げていた事であった。これで日本側が満州からシベリアに送ったという人数とソ連が受け入れた人数が大きく違う理由が理解できたと思う。「貴方の姓はコザカイですか？ 名前は何といますか」という質問から始まり非常に詳しく色々な事を知っているのにびっくりした。

ここで共通に問題になりソ連人にはどうしても納得して貰えない一つの事があるのが判った。それはソ連では学歴と軍隊での階級と社会での地位が全てイコールであるという事である。大学卒は軍隊では将校であり社会では指導的役職につく。高校卒は軍隊では下士官であり社会ではミドルであり、中卒は軍隊では兵隊であり社会では労働者である。これはその人がいかに努力しても成績が優秀であっても下士官になる事はなく下士官が将校になる事は絶対にないのである。ソ連ではそれが当たり前なのだ。だから日本軍のように小学校卒業で兵隊から下士官になり準尉などという事はソ連人には全く理解できない事なのである。だから捕虜名簿作成中にこのような日本軍将校が小学校卒である事を知ると、お前はニセ将校であるヒートリー（ズルイ人の事を言う）だと言ってしつこくなじるのであった。

又その反対で大学出の一等兵や二等兵は日本軍にはザラにいるのだが彼らはそれが理解できない。お前は大学を出ているがなぜ兵隊に化けているのだ？ お前が兵隊である事が本当ならお前は何か悪い事をして降格されたのであろう。どういう悪い事をしたのだと、これまたしつこくしつこく食い下がるのである。この違いは彼らには永久に理解できない事なのであろう。

我々は一冬越して死ぬ奴が死に生き残った者は又連れられて1500名の新しいラーゲルに収容された。その後、我々は山から下りてトリムスカヤの駅で材木の貨

車積みの作業に変わり、少し山よりは楽になってほっとしたのであったが、食糧の乏しさと塩分の不足にむしばまれ悩まされていた。人間は砂糖が無くても生きられるが塩が無くては生きられない。塩が欲しい、皆が塩にカツれていた。

駅で材木をトラックから降ろしたりプラットホームに整理して並べたり、入ってくるワゴン（列車）に材木を積み込んだりする仕事の合間に貨車や客車が通過する。その中に岩塩を積んだのが通るという情報に我々は驚喜した。岩塩列車が通る。「よし」貨車から叩き落として岩塩を取ろうと長い棒や竹など色々探して用意をした。ソ連兵の目を盗んでの作戦である。いよいよ岩塩列車が来た。長い貨車に岩塩がむごうさに積まれて何台も連なって通るのだ。駅なので少しスピードを落とした列車に向かって棒や竹竿を振り廻して岩塩を叩き落とす。疲労・衰弱した体での必死の挑戦だ。

バラバラバラと岩塩が落ちる。列車はゴウゴウという音と共に去った。それとばかりに今度は線路上を這いずり廻りながら叩き落とした岩塩を探すのである。しかし野積みされた岩塩はみんな真黒にすすけて石となかなか見分けがつかない。これかなと拾った塊をしゃぶってみる。石だ。放り出して又拾ってなめる。その繰り返しの内、あった！ 口の周りを真黒にしながらか岩塩にシャブリつく。あっちでもこっちでも岩塩を見つけた戦友の歓喜の音がする。あったあった。岩塩だ。塩がおいしい。塩が甘い。体が塩を求めている。涙がポタポタと落ちる。シャブリついた岩塩が白く氷砂糖のようになりだんだん小さくなる。やっとシャブルのを止め他の岩塩を探しポケットに入れる。待っている戦友に分ける為だ。必死で這いずり廻っていると怒号が飛んで来た。

「ダワーイ ヤンボスキー ネリジャー ラポーター」

警備のソ連兵に見つかってしまったのだ。見つかるのは当然、大声を出して岩塩を見つけて喜んでいたのである。

我々は又木材の積替の仕事（ラポーター）に戻った。長いプラットホーム、それを越してプラットホームの無い所にまで材木は積まれている。そのハシからハシまでマンドリン（自動小銃）を肩に警備のソ連兵が巡回している。そのスキをついての危険な岩塩落としだ。全員が関わるわけにはいかないので警備兵が一番遠のいたところで作業しているものがプラットホームを降りて列車の反対側から岩塩を叩き落とすのだ。だから列車が近づくまでは線路際に伏せて待ち受ける。命懸けの荒仕事だが、この岩塩が皆の命を救ったのであった。塩が甘い。こんな体験はもう二度としたくない。塩は辛いのが当たり前だ。俺の味覚は正常に戻るだろうか？ そんな心配を真剣にした。思えば哀しい、そしてくやしい思いである。

●ニコボックス（10/21・10/28）は次回掲載と致します。